

三省堂 国語教育

ことばの学び

a new way of learning Japanese



平成23年度版

『小学生の国語』『小学生の書写』
教科書特集号I



三省堂

「ことば・こころ・いのち」にこめた願い

「ことば」で自己を見つめる、「ことば」で世界を認識する。
それは、自己の確立をうながし、自身を大切に作る「こころ」を育てると同時に、
他者を認識し、尊重する態度を育てることでもあります。
言葉の力の充実は、生きる力に結びつき、
一人一人の「いのち」を大切に作る生き方を保証することとなります。



わたしたちは、子どもたちの人間形成に資するために、
「ことば・こころ・いのち」を以上のような関係でとらえ、基本理念といたしました。



三省堂 国語教育

ことばの学び

a new way
of learning
Japanese

平成23年度版『小学生の国語』『小学生の書写』教科書特別号I

CONTENTS

- 02 学習の自立を求めて 中洩正堯
- 04 『小学生の国語』基本コンセプトと教科書のつくり
- 08 これからの授業に働きかける教科書 尾木和英
- 10 より確かで深い学びへの誘い『学びを広げる』の多様な機能 松友一雄
- 12 思考を育てる「書くこと」の学習 井出一雄
- 14 子どもと本をつなぐ仕掛け 塩谷京子
- 16 『小学生の書写』基本コンセプトと教科書のつくり
- 18 学びの出口を強く意識した国語科書写 松本仁志
- 20 考える力を育てる国語科の教科書 三浦和尚
- 21 小さな点一つまでもビビッドにしたい 新谷雅弘



学習の自立を求めて

●『小学生の国語』監修代表 兵庫教育大学名誉教授 中洌正堯



なかす まさたか 兵庫教育大学名誉教授。国語教育探究の会・国語論究の会代表。専門は国語教育地域学。

育ちゆく小学生に向かって、たのもししい人格たれと呼びかけたのは司馬遼太郎である。たのもししい人格であるためには、自己を確立すること、自分に厳しく、相手にはやさしくすること、いたわりという感情を持つことだと言っている。(「二十一世紀に生きる君たちへ」)——小学生が将来をかけて、自然と科学・技術、そして国家と世界という社会の調和を求めるたのもししい人格へと成長することの期待である。

学校教育の各教科、道徳、特別活動並びに総合的な学習の時間に展開される内容は、小学生に、自然と文化、そして社会を読み解くための基本となる知識・技能を提供し、自己確立に寄与しようとするものである。

その中であって、新学習指導要領下の国語科は、大きく二つの役割をさらに積極的に担うことになった。一つは、言語に関する知識・技能や態度にかかわる国語科固有の任務である。いま一つは他教科等の言語活動を支え、同時に言語活動上の問題に学びつつ、それを解決する任務である。

こうした自覚のもとに、『小学生の国語』に

こめた第一の願いは、「読み解くに価する自然と文化、そして社会の内容を配列すること」である。——学習の興味・関心はここに始まる。

第二の願いは、「児童の学習の自立と教師の授業の創意工夫を推進すること」である。——

そのため、上下巻方式ではなく一冊にし、年間の見通しと振り返りを可能にする。単元は領域・事項の独立型とし、関連指導、総合指導は教室の創意工夫(学び合い)にゆだねる。さらに別冊『学びを広げる』を準備し、児童の学習の自立に供し、教師の授業の創意工夫並びに他教科等の言語活動に資する。

第三の願いは、「学習指導の精選、重点化(習得)と読書学習の推進(活用・探究)を図ること」である。——他教科等との連携をも導く読書学習の保障は学習の自立の保障でもある。そのため読書のきめ細かな案内を行う。

第四の願いは、「漢字学習の授業改革をすること」である。——書写の学習指導、語句・語彙の学習指導と一体化した漢字学習の授業を進めることによって、この面からも学習の自立を支援する。

第五の願いは、「すべての言語活動を表現活動で裏打ちすること」である。——表現活動は記録をベースとし、気づき、感想、意見を加える。その習慣化もまた学習の自立である。



新しい教科書観に立った

新しい2分冊構成

学習意欲を喚起する教科書

学習習慣を確立する教科書

見通しをもって学習に取り組める教科書

あらゆる段階で学習を振り返ることができる教科書

読書生活を豊かにする教科書

表現に生きる語彙・語句が身につく教科書

日常的に「書くこと」に取り組める教科書

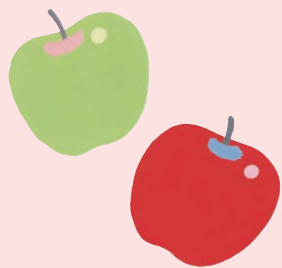
すべての教材に「考えること」が位置づけられている教科書

『小学生の国語』
『小学生の国語 学びを広げる』

自ら学び、自ら考え、自ら問題解決する力をはぐくむ

『小学生の国語 学びを広げる』

個に応じた学習を前提とした「言葉の教科書」です。
主体的な学習活動を進めるための情報を盛り込み、
探究的な学びへの展開を図っています。



国語科で学習した
知識・技能を
整理する

『小学生の国語』

一斉学習を前提とした「国語の教科書」です。
基礎的・基本的な知識や技能の確実な習得と、
習得した知識や技能の活用を目指します。

他教科・総合的な
学習の時間等でも
活用できる



語彙を豊かにする



1年は、国語の学びを無理なく自然にスタートできるよう配慮しています。上・下各巻末に「学びを広げる」パートを配置し、2年からの、新たな2分冊構成の学びへ円滑に接続します。

一年は、
上・下巻構成



読書生活を
充実する



自学により
学習習慣を確立する



『小学生の国語』 基本コンセプトと教科書のつくり

新しい教科書観に立った二分冊構成です。基礎・基本をしっかりと身につけ、
思考力・判断力・表現力を育むための確かなプログラムを提案します。



『小学生の国語』

すべての児童が国語の授業とともに学ぶ教科書。一年間を上・下巻に分けず一冊とし、学年・学期・月・教材など様々な時期や段階で、学習を見通したり、ふり返ったりすることができるようにしました。

漢字取り立て教材を繰り返し学習し、漢字を確実に習得できます。



一教材一領域に焦点化し、学習のねらいが明確です。



あらゆる領域の教材で、関連する本を紹介しています。



伝統的な言語文化に自然に親しむことができます。



『小学生の国語 学びを広げる』

児童が自ら学ぶ教科書。学習した知識や技能を整理しつつ、個々の児童の興味・関心に応じた主体的な学習を支える情報や資料を豊富に採録しました。多くの漢字を読む機会を持つように、未習の漢字も用い、既習の漢字も含めほとんどの漢字に振り仮名が付いています。



言葉の図鑑

ビジュアルな紙面で言葉への興味を喚起する図鑑



いつでもどこでも

言語生活の様々な場面で活用できる言葉の便覧



言葉の海へ

語彙を広げ言語感覚を磨く用例や言葉遊び



漢字探検

漢字の主体的な活用を支える音訓ごとの用例辞典



読書の森で

読書生活をより豊かにする本の紹介や作品群



古典の世界

写真や絵を通して古典の世界に親しむ図説



これからの授業に働きかける教科書

● ILEC言語教育文化研究所 尾木和英

いま求められる学習指導とは

各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに、児童の興味・関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫すること。

これは新学習指導要領「総則」において、指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項として示された文言である。

いま国語科の学習指導に求められているのは、生涯にわたっての学習にかかわる、言語の基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着であり、それらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力の育成である。

そうした力は、教師の指導を受け身になって把握しようとするような活動では身につかない。必要なのは、子ども自らが知的好奇心を働かせて学習を受け止め、主体的に学習活動を展開するなかで生きて働く言語の力を獲得

得することである。

子どもたちの自ら学ぶ姿勢、主体的な学習態度を育て、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、それらを活用する力を育てる。これは実際には容易なことではない。いま、

こうした基本的な考え方を踏まえた学習指導の開発が重要な課題となり、同時にそこでの学習活動を支える新しい発想に立つ教科書が求められている。



『小学生の国語』が目指すこと

主たる教材として重要な役割を果たす教科書については、その質・量両面での充実が求められる。子どもが学習内容について十分に理解を深め、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けるとともに、それらを活用する力を大きくむよように、繰り返し学習や知識・技能を活用する学習、発展的な学習に自ら取り組み、知識・技能の定着や思考を深めることを促すような工夫が凝らされた読み応えのある教科書が提供されるような諸条件が整えられることが重要である。

平成二十年一月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善については、主たる教材として重要な役割を果たす教科書について、前述したような学習指導に機能するよう、質・量両面の充実を求めている。こ

こに述べられている「これからの学習指導への機能」「質・量両面の充実」には深い意味が込められている。

新学習指導要領では言語活動の充実が重視されている。それは単に話し合いや発表を位置づければよいといったものでない。国語科においては、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を確かに身につけることが求められている。

そこでは学習意欲を向上させ、主体的な学習に取り組む態度を養うなかで、言葉を通して的確に理解する能力、論理的に思考し表現する能力、言葉で伝え合う能力の育成が求められる。さらには、わが国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことがこれからの国語科の学習指導の課題になっている。

『小学生の国語』は、こうした新しい学習指導の開発を支える教科書を意図して編集・発行された。

新たな授業観による指導開発

国語科の授業では、各教科等における知識・技能の活用を図る学習の基盤となる言語の能力をつけるため、新たな授業観による指導開発が求められることになる。

これからは各学校の実態に応じて、多様な

学習指導が展開されることが予測される。

例えば、まずは全員が共通に基礎的・基本的な内容を習得することを中心とする学習を行い、その学習状況に応じて個別指導やグループ別指導などが行われることが考えられる。さらに、補充課題、深化課題、発展課題などに取り組む課題別学習が行われることもある。重要なのは、指導のねらいを明確にし、一人一人の子どもが主体的な学習の展開によって基礎的・基本的な言語の知識・技能を身につけ、これらを活用して思考力・判断力・表現力などの力を確かに身につける授業を効果的に展開することである。

『小学生の国語』はそうした新しい授業観による指導開発に役立てるため、二冊構成をとっている。一冊は、年間指導計画に基づいて、毎時の授業において学習指導を展開するための内容を主とする教科書であり、もう一冊が、補充的・発展的な学習を選択的に展開し、主体的な学習活動の充実を図るための情報・資料を主とする、学習を広げ深める教科書である。

双方向への願い

『小学生の国語』にはいくつかの思いが込められている。

第一は、子どもたちの主体的な学習意欲に働きかけ、いきいきとした学びを促し、学習習慣を育てる教科書である。

第二は、子どもたちが確かな言語の力、思考力等を身につけることのできる教科書である。

第三は、先生方の指導開発に機能し、学習指導要領に示される国語の力を確かにつけることのできる教科書である。

そして第四が、系統性の重視、幼・小・中の接続の重視によって、子どもの育ちとともに学習が展開される教科書である。

こうした思い・願いの実現のためには、全国での実践との双方向の連携が欠かせない。『小学生の国語』へのご理解とご支援を心から願う次第である。



おぎ かずあき 東京女子体育大学名誉教授、ILEC言語教育文化研究所代表理事、文部科学省視学委員。これまでに文部省中央教育審議会専門委員、同学習指導要領改善調査研究協力者などを歴任。



『学びを広げる』の多様な機能

●福井大学教育地域科学部 松友一雄

『学びを広げる』と題した二冊目の教科書は、『小学校の国語』の兄弟である。

この二冊は、それぞれ異なる働きを持っているが、相互に結びつくことによって、これまでになかった学びを実現することができる。そのいくつかの特徴をここでは紹介したい。

学習者の疑問や意欲に対応する

日々の学習の中で学習者がふと感じる「なぜだろうか」という疑問や「もっと知りたい」という欲求を逃さず、学習へと導くことは、主体的な学習習慣を育むチャンスである。二冊目の教科書である『学びを広げる』は、そうした学習者の心の動きに寄り添えるように作られている。例えば二年生の「言葉を覚えよう」は、学習者が「もっとたくさんの言葉を知りたいなあ」と感じたときに、一人で読んでも深い学習に誘えるように作られている。様々な辞書が学習者の意識よりも細やか

言葉の奥深さや伝統への導き

学習者が生活の中で目にしたり使ったりしている言葉に向き合い、その意味や価値について考える学習は、言語感覚を養うとともに、言葉の可能性や価値を発見する良い機会となる。

四年生の「ユニバーサルデザインってなに？」では、生活の中の様々な事物を「ユニバーサルデザイン」という言葉を用いて認識する学習が用意されている。

また、「色、いろいろ」では、伝統的な色の呼称が微妙な色の違いとともに示されており、伝統的な言語文化に自然に出会うことができる。

また、各学年の学習に深く関わる「学習語彙」を示すことで、国語の学習そのものに対する理解を深め、より主体的な学習意識を形成することができる。

多様な読書への誘い

小学生の読書生活を絵本のある生活にしたという願いから、絵本を紹介するページを置いている。また『小学校の国語』においても、各教材の後に読書案内を示し、「あまみさんの部屋」では児童文学へと学習者を導いて

な形で提示されており、辞書の種類が体系的に理解されることと同時に、学習者自身の疑問がより詳細に深化していくことをねらっている。



第2学年「言葉を覚えよう」

いる。

また、学習者自身がこの本をふと手にして、何気なく読み始めてみることができると教材をいくつも用意している。休み時間や自習の時間などちょっと空いた時間に手元に読むものがあることが大切と考えるからだ。



第4学年「ユニバーサルデザインってなに？」



第4学年「色、いろいろ」



まつとも かずお 福井大学教育地域科学部准教授。ことばの力の具体的な形成過程を明らかにし、より効果的な授業・学習のあり方を模索している。また、サイトを立ち上げて学校現場への多角的な情報支援に取り組んでいる。(http://www.jle-labo.com/)

言葉の使い方を明確に示す

国語の学習だけではなく、他の教科の学習の中でも「言葉を使う」場面が増えている。学習者の、「どうすればいいの?」という疑問に対して、方法や手順を簡潔に示し、学習者が実際に言葉を使えるようにサポートできるように作られている。

三年生の「アンケートを活用しよう」では、アンケートの取り方やアンケートの整理の仕方など実際に学習者が「アンケートをする」際に必要となる方法がわかりやすく示されている。さらにアンケート用紙やアンケート項目の作り方なども視覚的に示しており、必要ときにさっと見てすぐに使えるように作られている。そのため、国語以外の教科の学習の中でアンケートを行う場合も、教師がこのページを示すだけで、学習者自身が簡単に活用することができる。

学習者のための本

全体を通して、この『学びを広げる』は、写真や絵、図表など視覚資料がふんだんに使われている。「ひと目で分かる簡潔さ」を重視しているのは、この本の使い手が学習者自身であることを願っているからである。



第5学年「不思議な絵本」

思考を育てる「書くこと」の学習

●玉川大学教職大学院 井出一雄

昔から「児童は書くことが苦手」という声を耳にする。その背景には、「作文指導はどのように教えたらいかがよくわからない」という教師の指導上の課題があると考ええる。このような児童や教師の悩みを解決したのが『小学生の国語』である。

ここでは、主として、書くことの思考力を耕す教材の配列や内容構成等の工夫について説明する。

書く力の定着を図る教材配列の工夫

「書くこと」の指導の教材は、「手紙」「体験・生活文」「記録・報告文」「創作」「書くこと」で振り返る」の七つの系列になっている。特に、当該学年で重点となる書く力の定着を図るために、タイミングよく、春に設定の「体験文・生活文」、秋の終わりに設定の「記録文・報告文」の二系列によって、「書くこと」における話題設定、取材、構成、記述等の指導事項の習得を図る配列になっている。そして、学年

末に設定した「書くこと」で振り返る」の教材で、当該学年での書く力の習得の確認と次の学年へのつながりを意図した教材配列の工夫がなされている。

自ら主体的に思考し書くための視点の明示

文章を書くということは、言うまでもなく個別の営みである。そこで、どんな内容をどのように書くかなど、一人で考えて書くための道標が必要となる。この書くための道標が『小学生の国語』には示されている。次に例を挙げる。第一学年下の「みの まわりのいきもの」では、「どんなようすやうごきが見えますか。」とたずね、「かたち、おおきさ、いろ、うごき」を、書くときの視点として明示している。また、第三学年の「クラスのことを調べよう」では、「いつもんカード」を作りましょう」「文章にまとめましょう」という書くときの手順や視点をしっかりと明示している。

このように、教科書を基に児童自らが主体

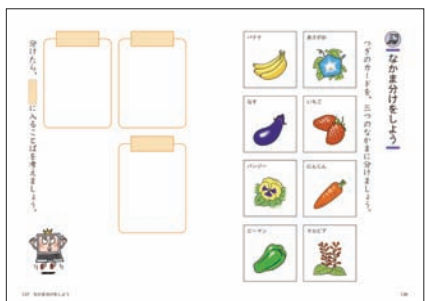
き、書くことの話題が設定される。そして、自らの取材力、構成力、記述力等を駆使して実作していくのである。この書くという一連の過程において、「今、どの部分に取りかかっているのか?」「そのときに必要なことは何か?」などを把握しておくことが重要である。このことを、第六学年の「説得力のある意見」の教材を例に説明する。(第五学年の「見学レポート」も同様である。)

まず、書くときの過程に即したためあてが①自分の意見を明確にする③効果的な組み立てを考える④五つの過程ごとにしつかりと明示してある。

次に、その①から⑤までの過程で、どのようなことに留意して取り組むかが分かりやす



第6学年「説得力のある意見」



第2学年「なかも分けをしよう」



第3学年「ふせん紙を使って整理しよう」

く例示してある。特に、「②意見に説得力を持たせる」「③効果的な組み立てを考える」「④読み手に伝わるように書く」では、それぞれの取材、構成、記述の仕方について、書くときの参考となる事柄が具体的に明示されている。このことは、書くときの過程を意識し、必要な文字表現力の定着を図ることを意図している。

最後は、③のページの「組み立ての例」や④や⑤のページの吹き出しなどで、多様な表現の仕方や確かめ方があることを促していることである。

このように、書く過程に即した表現力の定着を図るための内容構成になっている。

第1学年
「みのまわりのいきもの」



第3学年「クラスのことを調べよう」



いであずお 玉川大学教職大学院准教授。東京都内の公立小学校教諭・指導主事・統括指導主事を歴任し、3校の小学校長を勤め、現職に至る。

的に思考し書くことができるように、書くための視点、つまり、一人で考えて書くための道標が「書くこと」の教材随所に明示してある。

書く過程ごとに必要な表現力に着目した内容構成

書くという行為には、相手・目的意識が働

思考力の日常的な耕しを図る学習の例示

書くこととする事柄を取材したり整理したりするためには、言葉を紹介した思考力が働く。いくつかの事柄を比較して、分類したり関係付けたりするといった思考の耕しである。これらは、日常的に繰り返して指導することによって身に付いていくものである。

各学年、情報の収集や選択、発信などの学習活動を扱っている教材が思考の耕しとして重要な役割を果たしている。第二学年の「なかも分けをしよう」、第三学年の「まとめた言葉」は、いくつかの事柄を比べながら分類していくための思考力を育成する教材である。

また、第四学年の「ふせん紙を使って整理しよう」は、事柄ごとの関係を考え、ある目的のために整理していく教材である。第五学年でも「情報を整理しよう」という教材があり、情報を上位概念と下位概念に分けていく「ツリー構造」の学習を取り扱っている。このように、いくつかの事柄を比較すること、分類すること、関係付けることなどは、日常的に取り組んでいくように教材化されている。そして、取材したり構成したりするなど、書くときの学習に生きて働くようにしたいと考えている。

子どもと本をつなぐ仕掛け

● 関西大学総合企画室 塩谷京子

読書は自転車乗りに似ている。できるようになれば、見える世界が大きく広がるからだ。そのためにも、自分の意志と手順が鍵となる。

外で遊ぶことと本を読むことが子どもの楽しみだった時代は、既に遠い過去のこととなった。子どものまわりには、わざわざ本を読まなくても楽しめることが並んでいる。今を生きる子どもが読書を自分の「楽しみ」と感じるには、読書の階段を自分の意志で上っている感覚が必要であろう。しかし今やその階段に魅力を見出せないのか、それとも上る体力がないのか、階段を上れない子どもがいる。

学校教育でできることは、子どもに合った踏み台を用意し、自分で上れる高さの階段を作ることである。その踏み台として、読み聞かせや朝読書などの読書活動、資料や情報の探し方を学ぶ図書館利用指導、蔵書の充実や学校司書の配置など、学校図書館環境の整備が進められてきた。このような実践報告は各地で行われており、読書の効果は学力向上に

まで及んでいる。

しかしながら、子どもの意欲をかき立てるための踏み台は多岐に渡ること、読書が楽しくなるにはそれなりの手順が必要であることから、一口に「読書」の楽しみを教えたいと思っても容易なことではない。

そこで、子どもたちにとって身近な国語の教科書の中に、図書館活用に関する内容を一年生から系統立てて載せた（教科書には目印としてコンピュータマークで表示）。そうすることで、子どもは楽しく本と出会え、教師は教えるべきことが系統的に見えるようになった。

特に、読書と図書館活用の指導が別々の軸ではなく、図書館・情報という一つの軸で系統立てられている点が、小学生の実態に合っている。小学校低学年の子どもが読みたい本は、物語とは限らない。知らないことや疑問に思うことを解決するために図鑑を読みたい子どももいる。恐竜が好きで恐竜の本ばかりを読んでいる子どももいる。子どもがどこからでも読



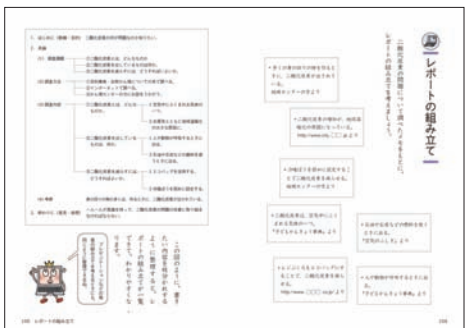
第1学年「としょかんへ いこう」



しおや きょうこ 公立小学校司書教諭を経て現在関西大学総合企画室特別任用教諭。著書に「しらべる力をそだてる授業！」(ポプラ社)などがある。



第6学年「ニュースと編集について」



第6学年「レポートの組み立て」

また、高学年になって、自分の主張をレポートに書けるように、段階を踏みながら、情報の調べ方や取り扱い方について、系統的に教材化されている。

「ニュースと編集について」では、集めたメモをもとに書かれたニュース原稿を比べることで、そこには編集という過程があることを学ぶ。教材の左右のページには集めたメモとニュース原稿が書かれており、情報を取捨選択したり、選んだ情報を並び替えたりするなど、編集した過程を想像することができる。

「レポートの組み立て」でも、調べたメモとレポートの構成を教材の左右のページに載せている。子どもが調べ学習をするときにも、

教科書の例のように調べたカードがたくさん集まる。いずれも、調べたカードをもとに、レポートの構成をどう考えたかが見えるためである。ここでは、調べたカードを全部使ってレポートを書き始めるのではなく、カードをもとにレポートの構成を考える過程があることを学ぶ。レポートの「終わりに」で自分の意見を主張するためには、どのような調査内容を選んだらいいのかを、調べたカードをもとに考えることができる。

このように、学びの過程を習得できるように、子どもが調べたメモやカードと、それをもとに作成したニュース原稿やレポート構成を見開きのページで見えるように工夫しているのも特徴である。

さらに、あくまでも「基本は読書」という姿勢は、すべての教材の後に読書案内があることから伺える。読書案内のコメントと表紙の写真も子どもと本をつなぐ役目を担っている。

つまり、教材文、読書案内、コンピュータ

マークのページは相互に関連し合いながら、スパイラル的に子どもと本をつないでいくのである。

これらの仕掛けにより、読書を楽しんだり、情報を集め吟味し活用したりすることが可能になる。それは自転車の乗りと同じように、「二生使える力」に違いない。

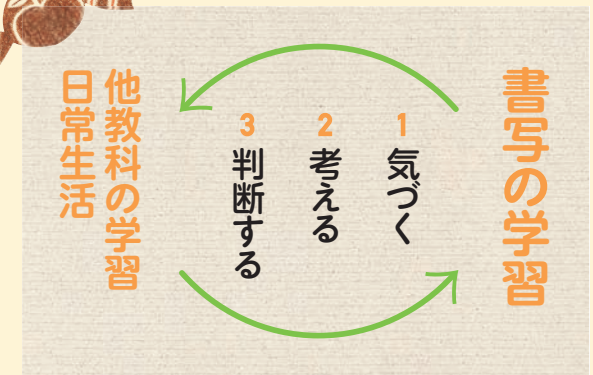


第3学年「ピータイトルねこ」

第3学年「カルタを作る」

『小学生の書写』 基本コンセプトと教科書のつくり

気づき、考え、判断しながら書く学びを通して、
統合的な書写運用能力を育成します。



書写技能を
統合して表現力を
育成する



他教科の学習や日常生活における、さまざまな書字場面・表現活動を想定し、表現力の一環として書写技能を生かせるように配慮しています。

「字を書くまで」を
ていねいに



子どもが字の形に意識を集中させる前に、手指の基礎的な運動をしっかりと体得できるよう、導入部の内容に配慮しました。

学習の流れが
見える

学習過程をわかりやすく示し、学んだことを主体的に生かしていけるように工夫しています。



「硬筆で学ぶ→毛筆で学ぶ→硬筆に生かす」という硬・毛の有機的な連携を基本の流れとして、硬筆書写能力の向上に資する学習を実現しました。

硬・毛の
有機的な
連携

ポイントが
ひと目でわかる



学びの要点を、簡潔で繰り返し口にしやすい言葉にして、大きく示しています。マークやイラストは、直感的に伝わるように工夫しています。

伝統文化として
文字をとらえる



学びの出口を強く意識した

国語科書写

● 広島大学大学院教育学研究科 松本仁志

学びを他の学習活動や生活に開く

新学習指導要領においては、書写の学びを他の学習活動や生活に開くことが重視され、基礎段階から活用段階までの系統性がより明確なものとなった。文字を書く基礎となる「姿勢・執筆」「点画や一文字の書き方」「筆順」などの事項から、「文字の集まりの書き方」に関する事項へ、さらに「目的に応じた書き方」に関する事項へと、第一学年から第六学年にかけて段階的に配されている。特に「目的に応じた書き方」に関する指導事項が高学年に位置づけられたのが新学習指導要領において大きく変わった点の一つである。

- 【第五学年及び第六学年】
- ア 用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと。
 - イ 目的に応じて使用する筆記具を選び、

毛筆の特徴を生かした指導による日常化への下支え

第三学年から毛筆書写が始まる。毛筆持つ弾力性という特徴は、文字や文・文章をリズムよく効率よく書く力、すなわち書き進める際の運動能力を育てるのに効果的に働く。また、文字を大きく書くことには、文字の細部を確かめられるよさがあり、正しく整った文字の仕組みを認知し、正確に書く力を育てる上で効果がある。これまでは、字形や配列に関する後者の指導事項が中心であったが、書字の運動能力育成に関する前者の指導事項が加わったところが、新学習指導要領において大きく変化した点の一つである。このことによって、多字数を書くことが多い実際の書字活動場面を下支えることになり、学びの出口である他の学習活動や生活へスムーズに移行できるようになる。

- 【第三学年及び第四学年】
- ウ 点画の種類を理解するとともに、毛筆を使用して筆圧などに注意して書くこと。

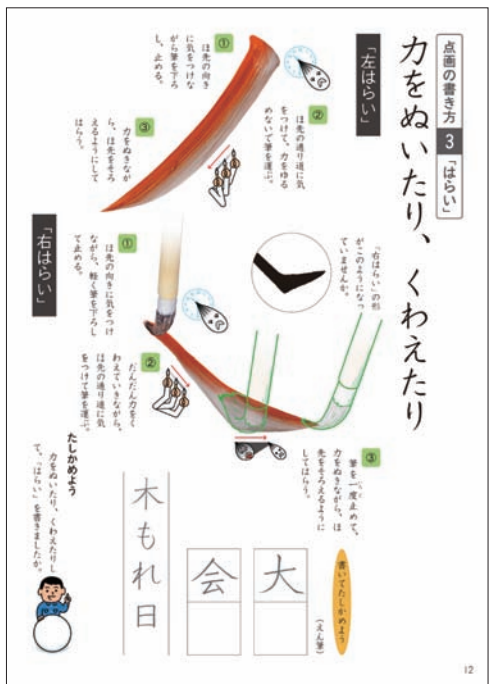
その特徴を生かして書くこと。

書写の授業では、半紙に書くことが多いが、学習活動や生活の場では、様々な用紙を使用する。その用紙が白紙なのか便せんなのか、また、どのような目的で書くのか、どのくらいの分量の文字を書くのかなどの、書く状況・条件の違いによって、文字の大きさや配列、書く速さ、使用する筆記具、書き方などは異なってくるのである。それらを適切に判断するには、実際の書字場面において、目的や状況を判断しながら書く力（運用能力）が必要である。そして、その運用能力を育成するには、低・中学年における基礎学習を土台とした（出口としての学び）を設定し、

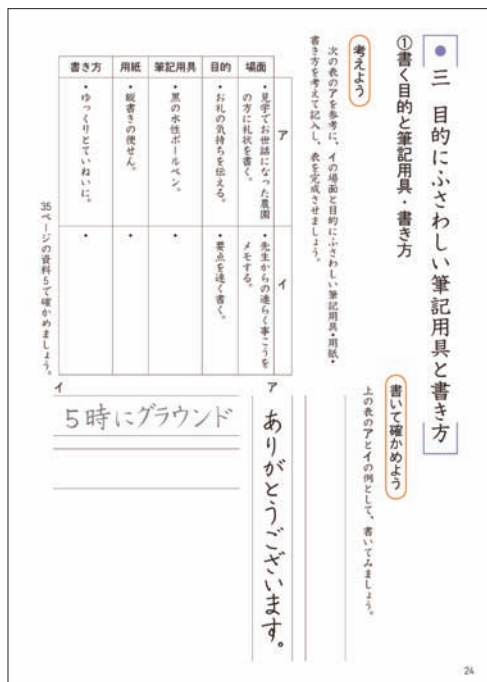
- 【第五学年及び第六学年】
- ウ 毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと。

中学年では、特に、横画・縦画・払いなどの点画の形とその形を作る筆の動きの種類や筆圧のかけ方などに注意しながら書く学習が求められる。

高学年では、穂先の動きと点画のつながりを意識して効率のよい運筆ができるようになる。各点画ごとの一定の穂先の動きについては、中学年で指導しているので、高学年では、点画から点画へ、文字から文字へのつながりに重点を置いた指導になる。文字や文・文章の書き始めから書き終わりまでを無理なくつないで書き進める効率よい書写のリズムを習得させたい。



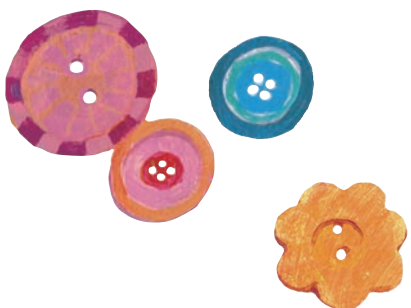
第3学年「点画の書き方③「はらい」」



第6学年「目的にふさわしい筆記用具と書き方」



まつもと ひとし 広島大学大学院教育学研究科准教授。新しい文字指導のカリキュラムを模索しています。



考える力を育てる 国語科の教科書

●『小学生の国語』『小学生の書写』編集主幹 三浦和尚



みうら かずなお 1952年、
広島市生まれ。広島大学教育
学部卒業。17年の中学・高校
教員を経て、現在、愛媛大学
教育学部教授(国語教育学)。

1 新しく編まれた教科書

すでに中学校、高等学校の国語教科書については歴史も定評もある三省堂から、このたび『小学生の国語』『小学生の書写』が世に問われることになった。「辞書の三省堂」が、こういう形で学校教育全般のことばの教育に責任を持つことは、まさに「ことばの三省堂」への発展的変身を果たしたと言うべきであろう。

「改訂」でなく新しく教科書を作るといふ、いわばゼロからの出発の過程は、峻険な山に登るに似て、苦しさばかりの果てに喜びが生まれるといった様相であった。

しかしその結果、私たちは、今日の子どものたちの学びを豊かにするための、これまでとは異なる新しい教科書を提示できたのではないかと、いささかの自負を持っている。

2 考える力を育てる教科書

子どもたちの学力については、これまでも様々なことばで語られてきた。ある時は書く力や音声表現力が取りざたされ、ゆとりや生きる力が叫ばれ、またPISA型読解力など、従来とは異なる能力観が提示されたりもし

た。それらはその時その時の社会的必要感に基づくものであったろう。

しかし、本質的に国語科で行うべきは、文字や語彙などの基本的な知識・技能を豊かにし、最終的には「ことばで感じ、ことばで考える力」を育てることである。特に「ことばで考える力」は、人間はことばでしか物を考えられないという前提に立てば当然のことながら、しかしすべての人間活動につながる点で、今日的にもきわめて重要である。

『小学生の国語』『小学生の書写』は、確かなことばの力を育てることは言うまでもないが、何よりも、ことばで深く、豊かに考える子どもを育てるといふ点を最重要課題として編集された。

この教科書で、精神的に安定した、思慮深い子どもたちが育ってくれることを信じている。そしてその子どもたちは、人生における自己実現をはかる力をもつことになるであろう。





しんたに まさひろ 1943年、
大阪市生まれ。1970年、『アン
アン』の創刊に参加して編集デ
ザインの仕事始める。以降、
雑誌だけでなく多数の本のデ
ザインを担当し続けている。

小さな点一つまでも ビビッドにしたい

●『小学生の国語』『小学生の書写』アートディレクター 新谷雅弘

私は四十年以上も販売部数を書店で競い合う雑誌や絵本、写真集などの制作現場にいて、主には雑誌をつくってきました。

そこでつくられる雑誌の多くは読んですぐに捨てられることを覚悟していましたが、だからといっていい加減に作って済むほど甘くはありません。読み捨てられるのが雑誌の宿命だとしても自分たちの雑誌だけは心に残って欲しいし、またそうさせなければ作った甲斐がないと思いつけてきたのです。

そうした中で、発売から何十年も過ぎていくのに「自分はあの雑誌に夢中になった。育てられた。」とお世辞でなく話しかけてくれる人たちに会います。するとわれわれ制作現場にいた人の気持ち伝わっていた人たちもいたのだと、うれしくなります。そんな評価を受けた雑誌に誌面デザインもいくらかは力になれたのかもしれないと考えますと、そこで得た誌面デザイン制作の方法が教科書をつくる場合にも役立てられるのではないかと考えました。

教科書の誌面でも、純粹な言語以外に視覚的な言葉がたくさん使われます。たとえば色彩、何かの形や線、大小の異なる文字、絵や写真やグラフなどです。これらをどのように

して作り出して配置するのかを考えるのはデザイナーの役目で、編集意図が学校現場や読者に明快に伝わるかどうか苦心のしどころなのです。表現の可能性は無限にあります。人間は小さな点一つにも感応するからです。読者は純粹な言語から伝わることだけではなく、上に述べた視覚的な図像も感受し、その構成意図も感覚的な次元で読んでいると思います。私たちの仕事は、編集現場のねらいをそれらの要素を総動員して、より理解度を高める方向に進めることです。

また、現場には三省堂という会社の社風も流れています。それは外の人間にはよくわかりませんが、私個人が中学時代から慣れ親しんできた三省堂の辞典の好ましい点にも社風は含まれていると考えて、私なりの評価も盛り込ませることができたらいいのではないかと考えました。

最終的にはそうしたいろいろな思いは編集長に集約します。そこで編集長との話し合いの中で私の中に生まれてきたのはビビッドという言葉で、「生き生きとした誌面にする」という言葉で、「生き生きとした誌面にする」という目標でした。生きていない誌面にはだれも興味をもたないからです。

ことばの学び

平成23年度版
『小学生の国語』『小学生の書写』
教科書特集号I

2010年4月10日発行
定価 100円(本体96円)
編集・発行人 八幡 統厚

●発行所 株式会社 三省堂
〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
TEL 03(3230)9427(編集)
振替 東京 00160-5-54300
三省堂印刷株式会社
●印刷所 三省堂印刷株式会社
〒192-0032 東京都八王子市石川町2951-9

サポート・ネットワーク・プログラム(SNP)

わたしたちは、教科書を中心としながら、さまざまな「学びのサポート・プログラム」を提供します。



著者・作者からの
メッセージ

授業作りの
アイデア

平成23年度版
『小学生の国語』『小学生の書写』

ウェブガイダンス スタート!

『小学生の国語』
『小学生の書写』
コンセプト

編集委員
特別コラム



三省堂 『小学生のデジタル国語』『小学生のデジタル書写』



授業が、変わる。

<http://小学生の国語.jp> へアクセス!

